

March 2008

大阪大学図書館報

vol. 41 no. 3 通巻 162号

発行所 大阪大学附属図書館 2008年3月14日発行
〒560-0043 豊中市待兼山町1の4

e-mail: kohowg@library.osaka-u.ac.jp



- ▶ 【特集1】新しい電子情報サービス
 - 電子情報基盤の整備に関して…P. 1
 - 2008年の電子ジャーナル・データベース等のサービスについて…P. 2
- ▶ 【特集2】機関リポジトリについて
 - 大阪大学学術情報庫 OUKA について …P. 6
- ▶ 利用者アンケート調査結果報告 …P. 8
- ▶ イリノイ大学モートンセンター 2007 国際図書館員研修プログラムに参加して …P. 10
- ▶ 「わたしのおすすめ本」 リレー連載 その3 …P. 12
- ▶ 教員著作寄贈図書のご紹介 …P. 12



特集 電子情報サービス

【特集1】新しい電子情報サービス

電子情報基盤の整備に関して

平尾俊一



サイエンスおよびテクノロジーの分野において研究を効率的に展開するためには、電子ジャーナルはデータベースとともに必須の情報メディアとなっている。さらに、電子ブックも柱になりつつある。結果として、冊子体の意義がどんどん薄れてきている。この数年の電子情報基盤の発展には目を見張るものがある。Elsevierの副社長と話をしたとき、今後の出版戦略はこの方向で益々拡大していくとのことであった。大学としても、図書館としても、ハードのおよびソフト的に対応せざるを得ないが、現実には後手に回っている感が拭えない状況である。図書館を中心に、今後の電子情報基盤の整備方針について議論してきたが、現在のところ次のような結論を得るに至っている。

全学共通の電子的資料として、大手出版社 (Elsevier, Springer LINK, Wiley InterScience, Blackwell Synergy, Oxford University Press, Cambridge University Press) および共通性が高く有用と考えられる電子ジャーナル (Nature, Science など) やデータベース、さらに学生が主体的に利用するもの (Lexis/Nexis Academic, 朝日新聞記事 DB 聞蔵, Japan Knowledge など) を取り上げている。この経費は将来可能な限り、全学共通経費として拠出することが必要であると考えられる。さらに、必要なバックファイルは購入する予定である。全学共通性は上記の資料ほどは高くはないが、整備しなければいけない有用な電子的資料としては、有力学会や重要な分野の電子ジャーナルやデータベースなどがあり、分野共通資料として位置づけている。人文社会系、医学系、理工系部局単位の受益者負担を基本とするが、全学的経費でも補填することになる。既存で現在使用中の全学共通性が高いデータベースに関しては、これまでのような利用者課金制度を改め、原則として全ての教員・研究員・学生が自由にアクセスできるようにする。以上のように、今後の電子的情報基盤が整備される計画である。

私見だが、情報基盤を整備するにあたり、従来型の図書館の体制では必ずしも十分ではない。電子情報基盤の発展に対し機能的に対応するためには、従来とは異なる電子図書館のような組織も必要となってくるのではないだろうかと思っている。電子情報基盤に関する部局が集まり、バーチャルな組織を構築しないと、時代に即応した電子情報基盤の構築、整備、運用が難しくなってくると考えられる。このような体制のもと、教育・研究の両面における電子情報基盤が効率的にサポートされるものと期待される。補足的だが、教育環境に関しても、新しいシステムが必要である。冊子体の学内での重複をできるだけ避け、空いた書庫のスペースをラーニング・コモンズ（グループ学習するスペース）として、学習のための教育環境を整えることも一案である。実際、本館、吹田分館の改修を機に、このようなスペースを導入することが計画されている。

図書館の機能が大きく変貌していく現状において、図書館の存在意義に対する新しい考え方が必要であると考えられる。

（ひらお・としかず 附属図書館副館長、吹田分館長、工学研究科教授）

2008年の電子ジャーナル・データベース等のサービスについて

附属図書館学術情報整備室



1) 電子的情報基盤整備経費の新設

附属図書館では、教育研究活動の必須の基盤となっている電子ジャーナルやデータベース等の電子的学術情報資料の計画的な整備と安定した財源の確保に関し、平成18年度以降、図書館委員会や電子図書館委員会において精力的に検討を行ってまいりましたが、全学的な検討の結果、平成20年度から、「電子的情報基盤整備経費」が新設されることとなりました。「電子的情報基盤整備経費」の財源は、当面、部局負担分と全学経費分とに拠ることとなりますが、将来的には、全学経費化する方向で合意が形成されています。

2) 2008年以降の電子的情報基盤整備

財源の検討と併行して、電子図書館委員会・図書館委員会において、電子ジャーナルやデータベース等の整備区分、選定方法等を検討し、以下の新たな枠組みで整備することとし、2008年新規資料選定を行いました。

＜整備区分＞

「全学共通」… 電子的情報基盤整備経費に拠る。

- ・大手出版社電子ジャーナル包括利用ライセンス
- ・全分野をカバーする有用なデータベース
- ・自然共通、人社共通の有力なもの
- ・学生利用が主体となるもの

「分野共通」… 人文・社会系、理工系、医学系の3系列。

推薦した系で経費を分担し、電子的情報基盤整備経費から経費を補填する。

- ・有力学会、特定分野のもので、部局を超えた共同利用がなされるもの

「その他のもの」… 部局経費等による

＜選定方法＞

「全学共通」「分野共通」とする資料の選定・中止は、以下の手順で審議・決定します。

- ① 新規推薦等の要望は、図書館委員会委員を窓口。
- ② 電子図書館委員会で採否等を検討、選定中止案作成。
- ③ 図書館委員会で審議、決定。

＜サービス方法＞

電子ジャーナルは、これまで同様、学内の研究室等から自由にアクセスできます。データベースサービスは、研究室等から利用する場合は、一部のものを有料制としていましたが、平成20年度から全て無料化することとしました。

注) SciFinder Scholar と PsycINFO については、契約上の理由などから、電子メールによる利用申請が必要です。

図書館ホームページをご覧ください。

3) 2008年のサービス資料

これらの措置により、2008年に学内で利用できる電子ジャーナルは、約12,000タイトル（有料のもの 8,000タイトル以上、無料のもの 約4,000タイトル）、データベースは、20種類以上となります。別表1にサービス資料の一覧を掲げます。

別表1 2008年サービス資料一覧

＜全学共通＞

資料名	区分
Elsevier社 Science Direct	EJ
Springer LINK	EJ
Wiley InterScience	EJ
Blackwell Synergy	EJ
Oxford University Press	EJ
Cambridge University Press	新規 EJ
Nature 本誌・姉妹誌	EJ
Science	EJ
JSTOR The Arts & Sciences I Collection	EJ
ProQuest Academic Research Library	新規 EJ
CiNii 機関定額制	DB
JDream II	DB
Lexis Nexis Academic	DB
朝日新聞記事DB 聞蔵II	DB
Japan Knowledge	DB
KOD 研究社オンライン辞書	DB



<分野共通 人文・社会系>

資料名	区分
PsycINFO	DB
MLA International Bibliography	DB
ERIC	DB
EconLit	DB
Index to Legal Periodicals & Books	DB
EBSOhost Psychology & Behavioral Sciences Collection	新規 EJ
EBSOhost SocINDEX with Full Text	新規 EJ
Project MUSE	新規 EJ

<分野共通 医学系>

資料名	区分
Cell Press	EJ
Nature Review誌	EJ
LWW Fixed 100 Print Retain	EJ
ProQuest Health & Medical Complete	EJ
American Society for Microbiology (ASM)	新規 EJ
Rockefeller University Press	新規 EJ
医学中央雑誌	DB
MEDLINE	DB
CINAHL Plus	DB

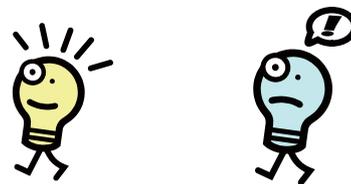
<分野共通 理工系>

資料名	区分
American Chemical Society (ACS)	EJ
Royal Society of Chemistry (RSC)	EJ
Thieme (Synlett, Synthesis)	EJ
日本化学会欧文誌	新規 EJ
American Physical Society (APS)	EJ
American Institute of Physics (AIP)	新規 EJ
Institute of Physics (IOP)	新規 EJ
日本物理学会欧文誌	EJ
IEEE All-Society Periodicals Package (ASPP)	EJ
IEEE Proceedings Order Plan (POP) Online	EJ
Association for Computing Machinery (ACM)	EJ
Optical Society of America (OSA)	EJ

<その他 (サイバーメディアセンター提供)>

資料名	区分
SciFinder Scholar	DB
CrossFire	DB
INSPEC	DB
Web of Science SCIE, SSCI, AHCI	DB
Journal Citation Reports Science ed.	DB
Scopus	DB

各資料の概要は、
図書館ホームページ (<http://www.library.osaka-u.ac.jp>)
をご覧ください。



4) 電子的情報資料サービスの拡充

(1) バックファイルの拡充

利用可能な情報資源を増やす一方、要望の強いバックファイルの拡充についても、大きな進展がありました。別表2に整備状況を示します。

別表2 バックファイル整備状況
<電子ジャーナル>

資料名	備考
Elsevier社 Science Direct	H19から3年計画で整備中
Springer LINK	整備済
Wiley InterScience	毎年少しずつ整備中
Oxford University Press	整備済
Nature 本誌	1987年以降整備済
Science	整備済
Cell Press	整備済
American Chemical Society (ACS)	整備済 (化学系COE経費による)
Royal Society of Chemistry (RSC)	整備済 (化学系COE経費による)

<データベース>

資料名	備考
Web of Science	
SCIE 自然系	1945年以降整備済
SSCI 社会系	整備済
AHCI 人文系	整備済

(2) 学外からの電子ジャーナル利用

平成19年5月より、ライセンス契約上及び技術的に対応できる資料については、サイバーメディアセンター及び情報推進部のご支援を得て、自宅等の学外からのアクセスを可能としています。大阪大学ポータル (<https://portal.osaka-u.ac.jp>) がその窓口です。

現在、学外からアクセスできる主要資料は、別表3のとおりです。今後も引き続き、提供資料の充実を図ります。

別表3 現在、学外からアクセス可能な主要資料

資料名
Elsevier社 Science Direct
Springer LINK
Wiley InterScience
Blackwell Synergy
Nature 本誌・姉妹誌・Review誌
ProQuest Health & Medical Complete

(3) OPAC からの電子ジャーナル利用

また、平成 19 年 7 月より、オンライン蔵書目録 (OPAC) から、学内で利用できる電子ジャーナルを検索することが可能となりました。もちろん、検索結果から電子ジャーナル本文の閲覧も可能です。

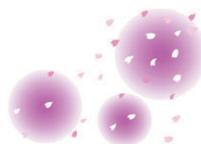
図書館内の OPAC 検索用端末は、セキュリティ上の理由から、電子ジャーナルにアクセスできないようにしてありますので、館内では、マルチメディア端末をご利用ください。

注) 学外から OPAC を利用した場合には、大阪大学ポータル経由で OPAC を利用した場合も含め、検索結果から電子ジャーナルにアクセスすることはできません。

(4) リンクリゾルバによる電子的情報資料の統合的検索・利用

平成 20 年度には、リンクリゾルバを導入し、OPAC や二次情報データベース等の検索結果から、学内で利用できる電子ジャーナル等の全文情報、所在情報、入手情報及び関連情報に統合的にナビゲートする機能を実現することにより、電子的情報資料の利用環境についても、整備を進めていく予定です。

(文責 室長補佐 星屋 真)



附属図書館クリスマスコンサート 「テルミンのタベ」を開催しました

クリスマスコンサート「テルミンのタベ」が 2007 年 12 月 19 日 (水) に豊中本館 6 階図書館ホールを会場として開催されました。

今回はテルミンの演奏に菊池誠サイバーメディアセンター教授、ベースギター伴奏に小川哲生理学研究科教授、そしてボイス・パーカッションには学生アカペラサークルの方をお迎えし、スタンダードナンバーやクリスマスソングなどが演奏されました。

また、菊池先生によるミニレクチャーではロシアで発明された世界最古の電子楽器テルミンの歴史や演奏方法などについて紹介されました。

コンサートは立ち見が出るほどの盛況で、学外の方を含め 260 名を超える聴衆はテルミンの幻想的な音色を堪能していました。



演奏風景 (中央がテルミン)



会場の様子



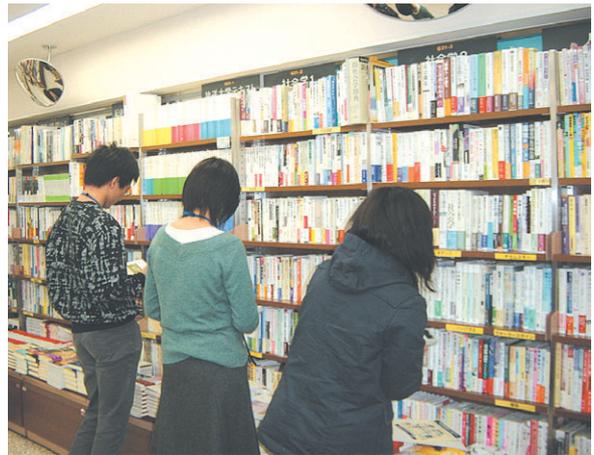


学生選書ツアーを実施しました

附属図書館での初の試みとなる学生選書ツアーが 2007 年 12 月 14 日（金）と 17 日（月）に行われました。この選書ツアーは学生さんの「こんな本が読みたい！」というご要望にお応えし、利用者ニーズを蔵書に反映させるために行われました。選書は紀伊屋書店梅田本店内で各日 1～2 時間行われ、豊中本館・生命科学分館・吹田分館の蔵書となる図書を、参加希望された方々に選定していただきました。

文、経、人、理、基、医、薬、工の各学部の参加学生 11 名が選んだ図書から、既に蔵書にあるものや個人購入が適当と思われるもの等を除いた 403 冊を購入しました。

この選書ツアーは今後も続けていく予定ですので、次回もぜひご参加ください。



選書ツアーの様子



デジタルリポジトリ連合 国際会議 2008 (DRFIC2008) が開催されました

2008年1月30日から31日にかけて、標記会議が大阪大学吹田キャンパス銀杏会館を会場として開催されました。前号にも掲載しましたとおり、この会議は進捗するオープンアクセス環境の中での機関リポジトリ(注)の現状をアジア・世界の視点から検討し、今後の課題を共有することを目的として開催され、8カ国から約200名の参加者がありました。

会議参加者は大学や研究所などの図書館職員、機関リポジトリの担当者、機関リポジトリやオープンアクセスに関心を有する研究者、学協会・学術出版関係者等で、さまざまな立場からの発表や活発な議論がなされました。

詳細は、下記のDRFIC2008公式サイトをご覧ください。

https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/DRFIC2008/index_ja.php

(注)機関リポジトリについてはP.6からの記事をご参照ください。



会議の様子



LibQUAL+® シンポジウム が開催されました

2008年2月29日（金）、図書館利用者の視点を重視した図書館サービス評価のためのシンポジウムが「図書館利用者を知る：LibQUAL+®によるサービス評価」と題して開催されました。当シンポジウムは附属図書館豊中本館で行われ、85名（49大学・機関）の参加者がいました。

LibQUAL+®は、テキサス A&M 大学チームと米国研究図書館協会（Association of Research Libraries, ARL）の調査プロジェクトによって 1999 年から協同開発され、図書館用のサービス品質に関する利用者アンケート調査と分析がパッケージ化されたサービスです。このサービスは米国内のみならず、これまでに全世界の 500 館以上が利用し、各国語にも翻訳されています。

附属図書館では、さらに利用者からのサービスに関する意見に耳を傾け、シンポジウムで得られた知見を今後のサービスの改善・充実に役立てていきたいと考えています。



パネルディスカッションの様子

【特集 2】機関リポジトリについて

大阪大学学術情報庫 OUKA (Osaka University Knowledge Archive) について



附属図書館学術情報整備室

1. OUKA への誘い

大阪大学の研究者のみならず、ぜひ、みなさまの教育・研究成果を OUKA から発信してください。OUKA に登録することによってみなさまの学術成果を世界中の読者に届けることができます。図書館がそのお手伝いをいたします。ご連絡は今すぐ。

附属図書館学術情報整備室 (電子コンテンツ担当)

電話 : (06) 6850-5071 / FAX : (06) 6850-5052

E-mail : ir-user@library.osaka-u.ac.jp

2. OUKA とは何か

いきなりこのように言われても「何のこと?」という読者が多いと思います。失礼しました。順を追って説明します。

OUKA とは、Osaka University Knowledge Archive の頭文字を取った愛称で、日本語では「大阪大学学術情報庫」(日本語略称「桜華」)と称しているように、大阪大学で生産されたさまざまな教育・研究成果を電子的に収集し、蓄積し、保存し、そして学内外へ無料で公開するためにインターネット上に設置された学術情報の保管庫であり、発信拠点です。このようなシステムを「機関リポジトリ (Institutional Repository=IR)」と呼んでいます。

IR を設置することによるメリットにはどんなことがあるでしょうか。

- ・学術成果の visibility (視認性) が高まり、インパクトが向上する。
- ・社会に対して、大学の教育・研究活動の説明責任を果たすことの一助となる。
- ・散逸しがちな電子データを大学の責任において永続的に保存することができる。

などなど、他にもいろいろと考えることができるでしょう。

IR はここ数年の間に世界中で急速に設置が進んでいます。Registry of Open Access Repositories (ROAR) ¹⁾ というポータルサイトによれば、世界中には 995 の IR があり、国別では、米国 225、英国 107、ドイツ 86、ブラジル 55、日本 45、カナダ 42、等々となっています(数字は 2008 年 2 月 5 日確認時点のもの)。ここでは日本の IR の数が 45 となっていますが、実際には試験公開中のものなどを含めて 70 以上も稼働しています²⁾。これには、各大学・研究機関での個別の努力に加え、国立情報学研究所 (NII) による最先端学術情報基盤 (Cyber Science Infrastructure=CSI) の構築推進委託事業 (=CSI 事業) が大きく与っています。

CSI 事業では、個別 IR の構築援助のみならず、複数大学が共同・

協同しての活動や、リンクリゾルバや教員業績データベースなどとの技術的な連携といった世界的にも目を見張るような実践が積み重ねられつつあります。

例えば、北海道大学、千葉大学、金沢大学による DRF (Digital Repository Federation) という活動があります³⁾。これは、大学相互の情報の交換・共有、IR の啓蒙のための活動等を通じ、IR を今後も維持・拡大していくための連携のあり方を模索することを目指しています。去る 1 月 30-31 日、本学の銀杏会館を会場に、DRF 主催による国際シンポジウム DRFIC2008 が開催され、大いに成功を収めたところです。

3. IR 登場の背景

このように日本で、そして世界で盛んになりつつある IR ですが、このようなシステムが登場してきた背景について触れておきます。

(1) シリアルズ・クライシス Serials Crisis

学術雑誌は、研究者が専門分野の最新の研究動向を知り、また同時に自らの研究成果を発表し、学術的なコミュニケーションをはかるために欠かせない重要な媒体です。近年、その学術雑誌が危機に直面していると言われていています。どういうことでしょうか。

日本の大学が購読していた外国雑誌は、1989 年ごろの約 40,000 タイトルをピークに減少し続け、2000 年代に入ると 20,000 タイトル程度まで半減してしまいました。それにも関わらず、大学が支出する金額は著しく増加しています。つまり、雑誌は値上がりを続け、その負担に耐えられなくなった大学はやむなく雑誌の購入を中止するという状態が続き、購読中止→値上げ→購読中止→値上げ→…、という負のスパイラルに陥っています。大阪大学ではまだしも、規模の小さな大学や研究機関では必要な文献の入手が困難になっていると聞きます。このことは研究者の立場からすれば、自分の研究成果に目を通してくれる読者や機会が失われているということをも意味しているのです。このように従来の商業出版者による学術雑誌を介する学術コミュニケーションが崩壊する危険性が叫ばれています。



(2) オープンアクセス運動 Open Access

学問は時代も地域も超えた人類の共有財産であるとの観点から、経済的な障壁を取り除き（無料で）、あらゆる学術文献の本文を誰もがインターネットで閲覧できる環境を創り出そうという活動が盛んになっています。この実現のために、主として2つの方法が試みられています。一つは無料の電子ジャーナル（オープンアクセス誌）を出版しようという動き⁴⁾、そしてもう一つが、各研究者が自らの学術成果をIRや個人のWebサイトで公開しようという動きです。

4. OUKA のめざすもの

OUKA は、2007年7月の部局長懇談会において鷲田附属図書館長（当時）から説明を行い、承認されました。

現在は主として、博士論文、紀要論文を登録すべき対象として取り組んでいますが、とりわけ博士論文については、論文提出と同時に OUKA への登録をも実現すべく、2007年秋にすべての研究科を訪問し、研究科長に説明と協力をお願いしてきたところです。基本的にはご理解を得られましたので、それを実効性あるものとすべく担当事務とも連携しながら実践していこうと考えています。

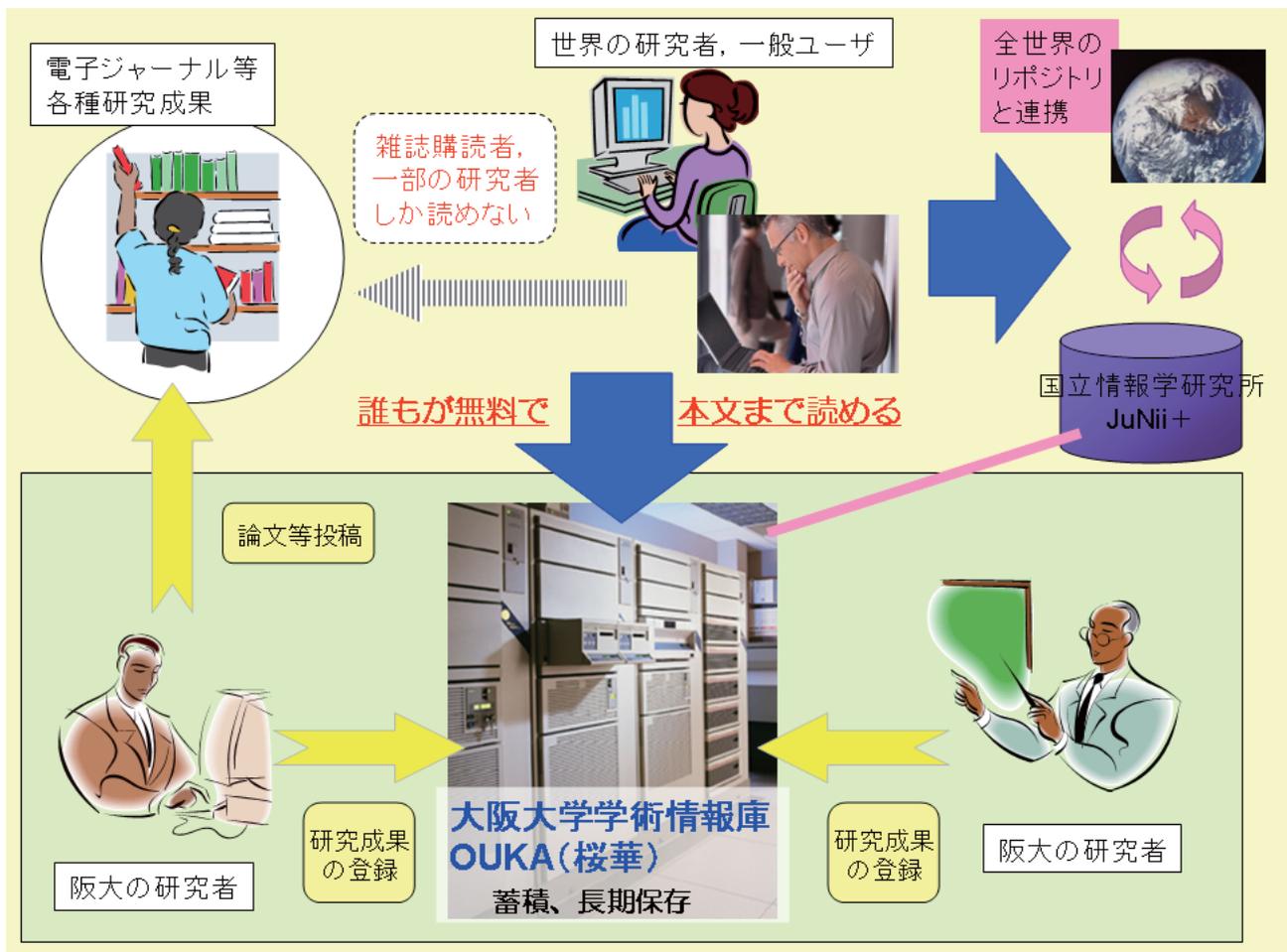
また、近年の図書館においては電子的な学術情報は必要

不可欠な存在です。これらの電子情報を整備し、統合的・効率的に利用者に提供していくことは重要な任務です。この枠組みの中に OUKA も位置づけ、学内外に広く大阪大学の知を発信していきたいと考えています。

しかし、コンテンツがなければ OUKA はただの箱にしか過ぎません。大阪大学の研究者のみなさま、ぜひ、みなさまの教育・研究成果を OUKA へご登録ください。そして一緒に OUKA を大きく育てていきましょう。

- 1) ROAR <http://roar.eprints.org/>
- 2) 機関リポジトリ一覧
<http://www.nii.ac.jp/irp/list/>
- 3) DRF <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php>
- 4) 例えば、Lund 大学図書館（スウェーデン）が管理している DOAJ (Directory of Open Access Journals) には3,138のオープンアクセス誌が登録されています（2008年2月5日現在）。
<http://www.doaj.org/>

（文責 電子コンテンツ主担当 後藤 慶太）





利用者アンケート調査結果報告

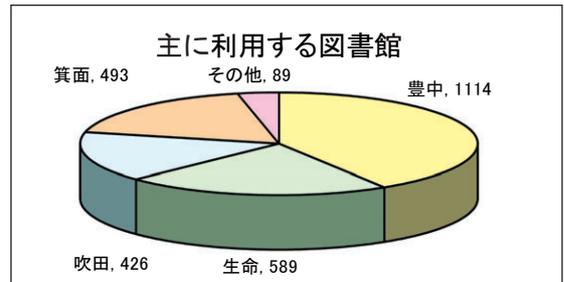
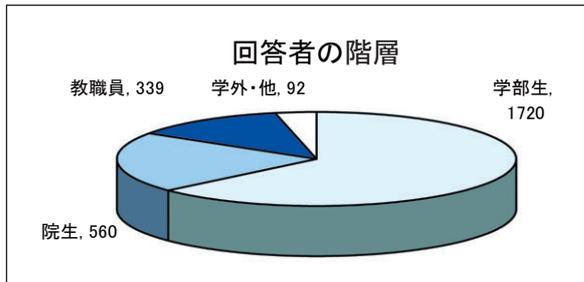
附属図書館サービス向上ワーキング・グループ

昨年11月6日から11月27日までの間、附属図書館では豊中本館と3分館で利用者アンケートを実施しました。全館で2,711名の方から回答をいただきました。みなさまのご協力に深く感謝いたします。ご回答いただいた内容の集計結果がまとまりましたのでご報告いたします。また、現在、ホームページへの掲載を準備中です。より詳しい内容は、ホームページをご覧ください。

1. 全館の集計結果について

1) 回答者の階層および主に利用する図書館内訳

回答していただいた階層のうち一番多かった学部生が63%、院生は21%でした。回答者のうち84%が学生で、特に学部生から多く回答をいただきました。

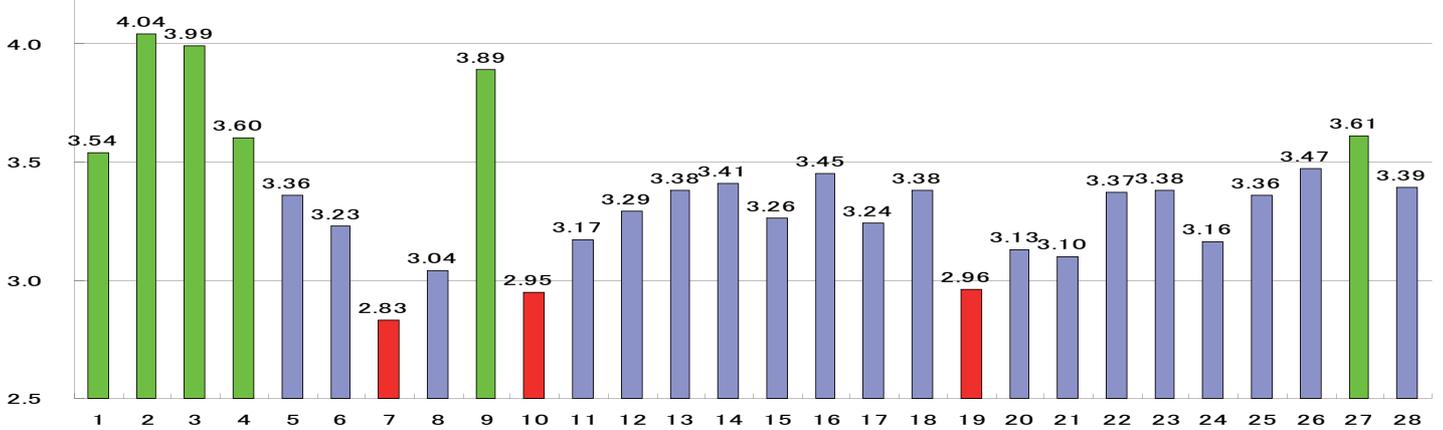


2) 質問項目ごとの「現状に対する評価」の平均値

アンケートでは、「現状に対する評価」と「図書館に対する期待」について5つの評価基準で質問しました。このうち「現状に対する評価」の平均値は、以下のとおりとなりました。緑色が評価の高い項目、赤が低い項目です。

現状の評価 1: 大いに不満 2: 不満 3: どちらともいえない 4: 満足 5: 大いに満足

「現状に対する評価」項目別平均(全館)



評価の高かった項目ベスト3

- Q2 キャンパスの中の便利な場所にある。
- Q3 館内が清潔である。
- Q9 静かに研究、学習ができる。

評価の低かった項目ベスト3

- Q7 複写機が適切に使いやすく配置されている
- Q10 盗難対策など十分にセキュリティー管理ができています。
- Q19 どんなサービスが受けられるかわかりやすい。

施設・設備環境について

- 1 開館日、開館時間が適切で利用しやすい。
- 2 キャンパスの中の便利な場所にある。
- 3 館内が清潔である。
- 4 空調などの環境が整っている。
- 5 館内の机・椅子の数が十分で使いやすい。
- 6 グループで利用できるスペース、室が整っている。
- 7 複写機が適切に使いやすく配置されている。
- 8 必要な機能を備えたパソコンが十分に用意されている。
- 9 静かに研究、学習ができる。
- 10 盗難対策など十分にセキュリティー管理ができています。

資料やデータベース等の情報提供について

- 11 図書が十分に揃っている。
- 12 雑誌・電子ジャーナルが十分に揃っている。
- 13 データベースが充実している。
- 14 資料が使いやすく配置されている。
- 15 資料案内や掲示がわかりやすい。
- 16 貸出冊数、貸出期間が適切である。

● 利用者支援・その他のサービス展開について

- 17 文献などを学内・外を問わず迅速に取寄せることができる。
- 18 図書館のホームページから必要な情報を得ることができる。
- 19 どんなサービスが受けられるかわかりやすい。
- 20 文献の探し方、入手方法の説明が用意されている。
- 21 電子ジャーナルや文献検索データベースの利用説明を手に入れやすい。
- 22 質問や利用説明を必要な時に受けられる。
- 23 インターネットを通してサービスが受けられる。
- 24 学外者や地域社会にサービスを提供している。

● 職員の態度、業務への姿勢について

- 25 利用者のニーズを理解している。
- 26 窓口・館内で挨拶や態度が良い。
- 27 質問・文献相談等に親切かつ的確に対応してくれる。
- 28 苦情・クレームへの対応が迅速・適切である。

2. 各館別のアンケート調査の結果と特徴について

それぞれの館の所蔵している資料及び性格で特徴ある結果がでています。要約すると左の欄のようになります。

各館の特徴

* 豊中本館

キャンパスでの位置や館内の清潔さでは評価されているが、サービス案内、複写機の配置、セキュリティーの項目で評価が低い。

* 生命科学分館

全般的に全館平均と比較して評価が高いが、貸出冊数・期間、開館時間の項目では評価が低い。

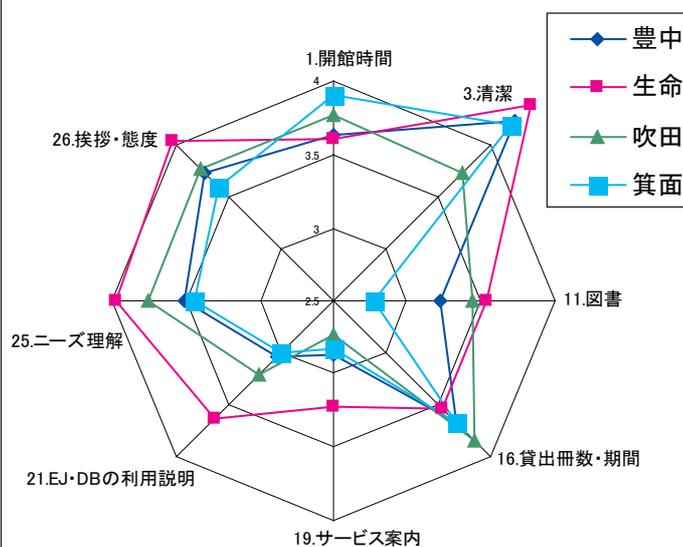
* 吹田分館

図書、雑誌、データベースの充実については評価されているが、館内の清潔、机椅子などの設備面で低い評価となっている。

* 箕面分館

設備面ではおおむね評価されているが図書、雑誌、データベースの充実面では評価が低くなっている。

各館の特徴比較(4館)



3. 自由回答の記入状況

自由回答欄には、全回答者 2,711 名中 34.6%にあたる 939 名から、合計 1,551 件の貴重なご意見をいただきました。階層別では学部生、院生の順、利用頻度別では、「週 1～2 回」、「ほぼ毎日」の順に多く、よく図書館を利用いただいている方ほど記入をいただいたという結果でした。以下、本当にごく一部ですが紹介させていただきます。

1) 肯定的な内容の主なもの

施設面では「落ち着いて長時間勉強できる環境なので好きです。」サービス面では、「借りた図書をどの館で返却しても良いサービスは大変ありがたいです。」「Web 上で予約・延長が出来るようになった事が有難い。」といった新しいサービスに対するご意見や「図書館は好きなので、がんばってより良くして下さい。」といった励ましの言葉もいただきました。

2) 否定的な内容の主なもの

否定的なご意見のうち多かったのは以下のとおりです。

① 施設面に関する意見・・・326 件

机、椅子の試験時の不足や、トイレの清掃、騒音他に対するご意見をいただきました。特に、空調に関する意見が多く寄せられ「夏場、暑くて集中できない。」豊中本館の夏場や季節の変わり目の時期の空調についての苦情が多くありました。

② 資料に関する意見・・・301 件

「基本的に図書が古い。」「もっと最近の本も入れてほしい。」というご指摘や特定分野の資料の充実を期待する意見が 171 件、他にも文庫新書や小説を入れて欲しいという意見も 49 件寄せられました。その他配置に関する意見「行方不明の本があって困った。全然違う棚にあった。」他 27 件が多く寄せられた意見でした。

③ 開館日、開館時間・・・250 件

開館日については、祝日休館や書架整理日休館に対する不満の意見をいただきました。「祝日や資料整理のための休館日を減らしてもらえると有難い。」「テスト期間に休館するのはよくない。」などです。また、開館時間については、夜間、土日の時間の延長のご意見「利用時間を延ばしてほしい。」に加え「朝もう少し早く開館してくれないものか?」というご意見もありました。

④ サービスに対する意見・・・105件

利用者支援、その他のサービスについて特徴的なのは、サービスの内容が分かりにくいという意見です。その結果、すで
に実現しているサービスへの要望「学外や吹田の本を取りよせてほしい。」「インターネットなどから貸出延長の手続きがで
きない。不便に感じています。」といった意見が多く寄せられています。そして「せっかく色々なサービスがあるのに、そ
れを把握している人数が少なすぎると思います。もったいないです。」「図書館の機能をもっと広報するべきだと思う。」とい
った図書館の説明、情報提供に対するご意見となっています。

⑤ 職員の態度他について・・・47件

カウンター窓口での職員の態度については、「基本的に不愛想ですよね。」「はたから見て明らかに適性を欠いた職員がい
なくもない。」「態度が悪い職員がいて、非常に不快だったことがある。」といった大変厳しい意見をいただいています。カ
ウンター窓口の対応が図書館サービスの入り口であり、そこで受ける印象が利用者の皆さんの図書館のサービスの利用を大
きく左右することを考えますと、非常に深刻な問題であると受け止めています。

⑥ その他

パソコン関係で、ウインドウズ端末にワードやエクセルのソフトを装備してほしい他、マナーに関して図書館職員に注意
してもらいたい、複写機の台数を増やして、料金を安くしてほしいという意見もいただきました。

4. アンケートを終えて感じたこと

アンケートを終え、皆さんのアンケート回答の集計結果および自由記述欄を読ませていただきながら感じたのは、まず、図書館に
対する期待の大きさと皆さんの「こうしてほしい。」という強い気持ちです。また、いろいろなサービスがあるのにもかかわらず図
書館からの説明や情報の発信不足のために十分に利用者の皆さんに届いていないということです。「ああ、もっと図書館からのい
ろんな情報発信をしてサービスを知ってもらわなければもったいない！」と感じました。今回のアンケートでいただいた多くの貴重
なご回答、ご意見を真剣に受け止め、今後のサービスの改善・充実に役立てていきたいと思っています。

(文責 利用支援課フロアサービス主担当 秋庭 公代)



イリノイ大学モーテンソンセンター 2007 国際図書館員研修プログラムに参加して

大塚志乃

平成 19 年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、2007 年 9 月 4 日から 11 月 2 日までの約 2 か月間、アメリカのイリノイ大学モーテ
ンソンセンターの国際図書館員研修プログラムに参加させていただきました。ここでは研修の概要と研修を通して感じたことをご紹介します。

●研修プログラムの概要

モーテンソンセンターはモーテンソン夫妻の寄付により 1991 年に設立されたセンターで、国際的な教育・相互理解・平和の促進のため
に図書館員に研修プログラムを提供し、地理的な位置や技術へのアクセスに関わらない図書館と図書館員の国際的な結びつきを強めること
を目指して活動しています。場所はイリノイ大学学部学生用図書館(Undergraduate Library)内にありますが、組織としては独立しています。

私が参加した国際図書館員研修プログラム (Fall 2007 Associates Program, Mortenson Center for International Library Programs, University of Illinois) はモーテンソンセンターの代表的な研修プログラムです。2007 年は 14 か国から 17 名が参加しましたが、現在ま
でに累計で 89 か国から 700 名以上が参加しています。



モーテンソンセンター副センター長宅でのホームパーティー

●研修内容

図書館情報学に関する講義や図書館員による業務説明だけではなく、多くの図書館や OCLC 等の機関訪問、2007 年イリノイ州図書館年次大会等の会議
やワークショップへの参加 (年次大会の分科会では別々にプレゼンテーションを行いました)、1 ~ 2 名での州内の図書館への訪問とホームステイなど、
非常に幅広い内容でした。

また、図書館員の自宅でのホームパーティーへの参加、アーミッシュ (電気や電話など現代技術による機器を使わずに生活する人々) の村やとうもろ
こし農場の訪問なども企画されました。



イリノイ大学のキャンパス



有名人を起用した読書推進ポスター

●イリノイ大学図書館

イリノイ大学は約 4 万人の学生をかかえる州立大学で、メインキャンパスはイリノイ州のアーバナとシャンペーンという 2 つの町にまたがっています（人口は両方の町を合わせて約 10 万人）。

イリノイ大学図書館は、約 1,000 万冊の蔵書を誇る米国で 3 番目に大きな大学図書館です。Main Library を始めとして学内の 47 の図書館（室）が有機的に運営されています。職員として約 100 名のライブラリアン（faculty 資格を持つ）と約 300 名のスタッフ（staff members）がおり、それ以外にサービスデスクや配架作業、目録、資料修復など各所で学生が働いています。

●アメリカの図書館活動の一端

見聞した図書館活動で印象に残っていることとしては、イリノイ大学の学部学生用図書館など一部の図書館では 24 時間開館が行われて学生もよく利用していること（バスも 24 時間運行）、ゲームとマンガが図書館界のホットな話題であること（イリノイ大学にもゲームコレクションがあります）、ドライブスルーで予約図書を受け取るサービス（オハイオ州の Westerville 公共図書館）、コピーしたものを紙に出力せずにメール添付でファイルとして送ることのできるコピー機の設置（イリノイ・ウエズリアン大学図書館）など多数挙げられます。

また、訪問したどの大学図書館でも、従来から行われているコース・リザーブについて、対象の資料をスキャナで読み取り、その電子ファイルを Web 上で提供するという E-Reserve が主になっていることが印象的でした。

そして、Web で提供されるサービスや情報の充実度はやはりさすがだと思います。レファレンス・ライブラリアンへの連絡手段として IM（インスタント・メッセージ）の利用が多かったり、動画投稿サイトのユーチューブに OPAC の利用手順を動画ファイルとして置いたりするなど、Web の積極的な利用が随所に見られました。イリノイ大学図書館のホームページでは、昨年 9 月から OPAC、データベース、検索エンジンの統合検索がワンクリックでできるようになっています。

また、日本との違いがよく指摘される図書館員については、その見識の広さと図書館全体を見渡したうえでのマネジメント、想像以上にコミュニケーションを大切にするとところなど、感嘆しきりでした。教員資格（faculty）を持つ責任と誇りから発せられるもののようにも感じました。

●参加者との交流

研修で見聞きした図書館の知識とともに私に深く刻み込まれているのは、2 か月間、文字通り「朝から晩まで」寝食を共にした 14 か国 16 名の研修仲間との交流です。教員、図書館長、図書館員、IT 技術者など参加者の職種や年齢層（20 歳代から 60 歳代まで）は幅広く、仕事の内容も関心のあるテーマも様々でしたので、皆の話聞くだけでも興味深いものでした。自国の政治経済や図書館の状況について意識が高い人が多く、自分を顧みて恥ずかしい思いもしました。意見が理解できないこともありましたが、母国語や国籍や宗教や習慣が違っていても結局のところは「本質は変わらない、個々人の個性の違いだけ」という当たり前のことを実感しました。彼らとの今後の交流も大切にしたいと思います。

また、「図書館に関しては先進国ではない」と言われ、多くの問題を抱える日本の図書館ですが、他の研修参加者から「他の図書館と郵送で資料を貸し借りできるのは郵便制度が信用できるからだね（自国では難しい）」「日本は図書館のサービスも技術も発達していて、あなたも多くの知識を持っているのだからもっと意見を言って欲しい」などと言われたことがあります。直接的にせよ間接的にせよ、日本でも何かできることがあるのではないかと（すべきではないかと）、との意識が芽生えたのも事実です。

最後になりましたが、海外研修の機会をいただいた国立大学図書館協会と大阪大学附属図書館の関係者の皆様にお礼を申し上げます。特に、2 か月間も迷惑をおかけした大阪大学附属図書館の雑誌担当の皆様には笑顔で送り出していただき、心から感謝しています。

関連 Web サイト

イリノイ大学モーテンソンセンター：<http://www.library.uiuc.edu/mortenson/>

イリノイ大学図書館：<http://www.library.uiuc.edu/>

（おおつか・しの 附属図書館 学術情報整備室学術情報収集班）





わたしのおすすめ本

リレー連載 その3

『本を読む本』 M. J. アドラー C. V. ドーレン

外山滋比呂 槇未知子 訳（講談社）1997

福島一樹



皆さんは本の読み方について意識したことがありますか？

世の中には読書を通してたくさんの知識を得ている人が大勢いますが、彼らはどのようにして本を読んでいるか知っていますか？

これらの問いかけに興味があるという人にとってはこの「本を読む本」は一読する価値が十分にあると思います。

この本の内容ですが、題名のとおりどのようにして本を読むべきか、著者が思う正しい本の読み方について書かれています。著者は読書のレベルを初級読書・点検読書・分析読書・シントピカル読書（注）の4段階に分類しており、それぞれの読書レベルの詳細と読書方法を紹介してくれています。読書の最終段階であるシントピカル読書が出来るようになるための読書との向き合いかた、シントピカル読書に至るまでの過程を具体的に書いて教えてくれているので非常に理解しやすい内容となっています。

本をたくさん読むことの重要性を理解しながらなかなか多読を実践できない人、ただ漠然と本を読んでいる人はこの本を読んでもらうことで何か新しい発見があるのではないかと思います。また、すでに本をたくさん読んでいて自分の読書方法に自信がある方にとっても確認の意味でこの本を読んでみてはいかがでしょうか？

最後に、学校において正しい読書の仕方を教えてもらった記憶がありますか？ ないのであればこの本が教えてくれます。是非手にとって一読してみてくださいはいかがでしょうか？

（注）シントピカル読書：同一主題を扱っている数冊の本を客観的に読み、主題についての理解を深める読書術

（ふくしま・かずき 工学研究科博士前期課程1年、附属図書館）



●●● 教員著作寄贈図書のご紹介 2007. Nov. ～2008. Jan. ●●●

（箕面分館への寄贈図書については、平成19年度に寄贈されたものを掲載しています。）

寄贈者氏名（所属）	※敬称略	書名
都出比呂志（名誉教授）		「前方後円墳と社会 再版」
溝上富夫（名誉教授）		「旅芸人は楽し：ヒンディー語劇海外公演の記録」
片渕悦久（文）		「ソール・ベローの物語意識 = The narrative consciousness of Saul Bellow」
園府寺司（文）		「大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書」他1冊
友枝敏雄（人科）		「社会学のアリーナへ：21世紀社会を読み解く」他2冊
桑野園子（人科）		「聴覚ハンドブック」他7冊
藤目ゆき（人科）		「現代の奴隷制：タイの売春宿へ人身売買されるビルマの女性たち」
田中仁（法）		「20世紀30年代的中国政治史：中国共産党的危機与再生の記録」
田中仁（法）、西村成雄（人科）		「現代中国地域研究の新たな視園」
山口和也（理）、山本仁（安全衛生管理部）		「基礎化学実験安全オリエンテーション」
杉田米行（言文）		「アジア太平洋地域における平和構築：その歴史と現状分析」他3冊
林田理恵（言文）		「ロシア語のアスペクト」他1冊
松野明久（国際公共）		「トラウマ的記憶の社会史：抑圧の歴史を生きた民衆の物語」
薦田憲久（情報）		「ビジネスシステムのシミュレーション」
野村泰幸（世界言語セ）		「オーラフ：自閉症児が語りはじめるとき」
宮本マラシー（世界言語セ）		「タイ語上級講座：読解と作文」
竹蓋順子（サイバー）		「竹蓋Vメソッドボキャビルdrill：93%の単語を忘れない」

詳細は教員著作コーナーのウェブページ（<http://www.library.osaka-u.ac.jp/kyoin/kyoin-kizo.htm>）へ